



医師の願いを叶える技術

リプト株式会社

代表取締役 **後藤 広明** さん



リプト株式会社
(明神町四丁目)

2007年創業。「医師たちのあつたらしいなあ…をカタチにする」をミッションに在宅医療機器をはじめ、現場の医師に寄り添った製品を開発している。

ものづくりで医師の悩みを解決できた。そんな思いから独立を決めました。ビジネスの視点から大企業では参入できないテーマが医療現場には溢れています。大手の企業に勤める中、感じていた歯がゆさを解消しようと、細かなニーズにこたえられる製品を開発しています。

アイデアの源は医師との対話。例えば、「ワイヤレス内視鏡カメラ」「エアスコープ」の開発は、誤嚥性肺炎に苦しむ患者を救いたいという医師との出会いがきっかけです。食べ物や飲み込み力が弱まることで起きる誤嚥性肺炎は、内視鏡検査を受けることで、発症リスクを抑えることができます。しかし、患者には病院まで足を運べない高齢者が多く、予防が進まない現状がありました。自宅で手軽に内視鏡検査を受けられる機器を作ることができると思いました。

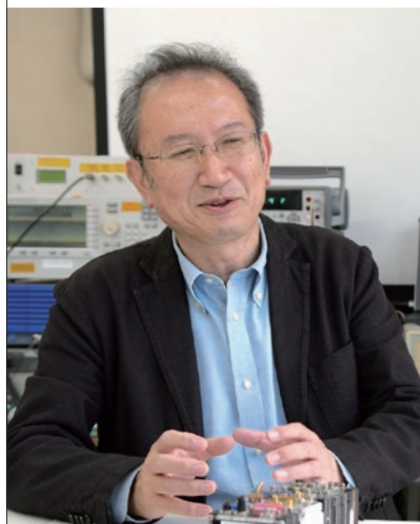
独立して11年が経ち、多くの医師から相談が寄せられるようになりました。医療とものづくりをつなぐことで、患者さんを救っていききたいですね。



8cm角の無線 まちから宇宙へ

株式会社アドニクス

代表取締役 **小島 要** さん



株式会社アドニクス
(台町四丁目)

1998年創業。アナログ技術を活かした開発力で手掛ける無線通信機器は、これまで17基の人工衛星に搭載されている。



オーロラ観測を行う「れいめい」や、小惑星探査を行う「はやぶさ2」など、さまざまな目的を持って人工衛星は宇宙へと旅立ちます。私たちが開発している無線通信機器は、そんな人工衛星の耳と口ともいえる機械。宇宙で観測したデータを、地球とやりとりするという重要な役割を担っています。

私たちの機器は、たった8cmほどの小さな箱。しかし、その中には地上から400km以上離れた場所とやりとりするための高度な技術が詰め込まれています。また、万が一故障が出てしまっても修理に行くことができない宇宙空間では、「絶対に壊れない」ことが求められます。過酷な環境にも負けない耐久性を追及する中で、いかに機能を高めるか。エンジニアとしての腕の見せ所ですね。

機器の開発に携わる中で感じるのは、宇宙を持つ無限の可能性。私たちの技術で、未知の世界を解明したいという人たちの力になれたら嬉しいですね。

明日を拓く、まちの技術者たち

唯一無二の技術で、社会の声にこたえる——このまちには、独自の強みで活躍するものづくり企業がたくさんあります。ここでは、製品へのこだわりや想いを通じて、ものづくりの舞台裏に迫ります。



歯車はものづくりの名脇役

坂西精機株式会社

代表取締役 **坂西 宏之** さん



坂西精機株式会社
(七国一丁目)

1945年創業。歯車一筋で培ってきた経験と技術を活かし、さまざまな企業のニーズにこたえるオーダーメイドの製品を中心に開発している。

機械の動きを支える緑の下の力持ちといえる歯車。私たちは70年以上にわたって、この歯車を作ってきました。外から見える部品ではないため、馴染みの薄い方も多いかもしれませんが、踏切の遮断機や駅のホームドアなど、皆さんの身近なところでも私たちの製品が使われています。また、工場ですべての産業用ロボットといった、ものづくりを支える機械の一部としても活躍しているんですよ。

組み込まれる機械の用途によって、歯車のつくりは変わります。サイズや重さのほかにも、騒音や発熱が少ないことなど、求められる性能はさまざま。そのため、私たちは製品の多くをオーダーメイドで製作しています。難しい加工を求められることもありますが、こだわりのものづくりをしている人たちに、技術でこたえることにやりがいを感じます。

少ない人員で効率的に作業を行うために、ものづくりの現場では機械化が進んでいます。しかしその一方で、人の手の微妙な感覚が必要な場面もまだまだ多くあります。近年、ものづくり離れ対策が叫ばれていますが、長い年月の中で培われた技術を守っていくためにも、ものづくりの醍醐味を次の世代に伝えていかなくてはと感じています。

社会は日々、変化のスピードを速めています。しかし、自分たちの手掛けたものが誰かの役に立つ喜びは、今も昔も変わりません。これからも、技術でものづくりの現場を支えていきたいですね。

